8 月 9 日に配信しました本リリースに誤りがありました（該当箇所 3 枚目）ので再送信させて頂きます。ご迷惑をおかけし大変申し訳ございません。何卒よろしくお願い申し上げます。

NEWS RELEASE

立命館大学

2023. 8. 21

報道関係者　各位　　＜配信枚数3枚＞

【立命館土曜講座のご案内】

9 月テーマ「京焼登り窯の新研究-3D 計測と新資料を中心に-」

開催日程 ： 2023 年 9 月 9 日（土）・ 16 日（土）・ 30 日（土）

開催方法 ： オンライン（Zoom ウェビナー）

9 月の立命館土曜講座は、立命館大学アート・リサーチセンターの企画として、「京焼登り窯の新研究-3D 計測と新資料を中心に-」をテーマに、オンライン（Zoom ウェビナー）で開講いたします。

どなたでも無料で受講いただけますので、ご関心のある方のご参加をお待ちしております。

記

■立命館土曜講座 9 月テーマ「京焼登り窯の新研究-3D 計測と新資料を中心に-」

(1)第 3388 回「京焼登り窯の新研究 1-五条坂「窯持」の近代-」

日時 ： 2023 年 9 月 9 日（土） 10:00～11:30

(2)第 3389 回「京焼登り窯の新研究 2-3D 計測で見る登り窯」

日時 ： 2023 年 9 月 16 日（土） 10:00～11:30

(3)第 3390 回「デジタル・ヒューマニティーズとデジタル・アーカイブによる学藝の革新 -そのさらなる可能性を探る-」

日時 ： 2023 年 9 月 30 日（土） 15:00～17:30　ハイブリッド開催　会場：創思館+オンライン

開催方法 ： オンライン（Zoom ウェビナー）
内　　容 ： 別紙参照
聴 講 料 ： 無料
定　　員 ： 400 人　※実施前日 12:00 までに要事前申込。定員に達し次第、受付を終了。
申込方法 ： 立命館土曜講座の WEB サイトよりお申し込みください。
https://www.ritsumei.ac.jp/doyo/
主　　催 ： 立命館大学衣笠総合研究機構
そ の 他 ： 文字通訳を配信しています。

以上

本リリースの配布先： 京都大学記者クラブ、草津市政記者クラブ、大阪科学・大学記者クラブ

●内容についてのお問い合わせ先
立命館大学衣笠総合研究機構　担当：武田・堀
TEL.075-465-8224

別 紙

■立命館土曜講座 9 月テーマ「京焼登り窯の新研究-3D 計測と新資料を中心に-」

(1)第 3388 回 「京焼登り窯の新研究 1-五条坂「窯持」の近代-」

日時 ： 2023 年 9 月 9 日(土) 10:00～11:30

講師 ： 早稲田大学人間科学学術院 准教授 余語 琢磨

講師による内容紹介 ：

京都府の伝産法指定工芸品「京焼・清水焼」といえば、茶道・華道の道具や、贈答品や土産物など、華やかな陶磁器が思い浮かぶ。一方、近代に入ると、「隠れた京焼」として電気機器用品等へのとりくみがあり、その生産額は伝統工芸品に比肩するか超えるものであった。

たとえば、耐酸陶器の開発から化学陶磁器を製造した高山耕山家、造幣るつぼを開発した入江道仙家、清水坂から深草に移転し電気碍子、工業用炻器を製造した松風嘉定家などは、よく知られている。また、明治末より移転者が増えた日吉地区では、装飾陶磁器からしだいに日用品・工業用品の中小規模工場が主となり、大正期後半から工員(陶工)中心に「市内最大」の労働争議が起きたことも、近代京焼の一側面である。

このような京焼の近代的変容については、木立雅朗らの一連の業績を除くと、さほど研究が進んでいない。そこで本講座では、京焼五条坂地区の N 社のご好意により、近年新たに提供を受けた窯業経営資料の詳細な分析を通じて、装飾陶磁から産業用陶磁生産に転じ成長していく近代京焼企業と、そこで働く陶工の具体像を検討することで、伝統的手工業生産の世界におとずれた「近代化」を素描してみたい。

(2)第 3389 回 「京焼登り窯の新研究 2-3D 計測で見る登り窯」

日時 ： 2023 年 9 月 16 日(土) 10:00～11:30

講師 ： 埼玉県文化資源課(早稲田大学文化財総合調査研究所)主任(客員研究員) ナワビ 矢麻

講師による内容紹介 ：

京都市内には、かつて京焼を焼いていた登り窯が点在している。最盛期には五条坂を中心に陶工が集まり、多くの登り窯が築かれ、時代に応じた様々な作品が焼成された。しかし、1970 年代には窯の火が消えて以来、その記憶とともに失われつつあり、保護を講じるべき近現代の遺跡であるといえる。私自身、調査に参加する 2018 年まではその存在を知らず、京都の街中に突如現れる登り窯の迫力に圧倒された記憶が新しい。

発掘調査や聞き取り調査など、登り窯の構造や歴史を検討するにあたり、その基礎的な情報の記録は必須である。しかし、登り窯のように複雑な構造をもつ立体物を記録する場合、従来の二次元的な方法では限界がある。そこで、複数枚の写真から三次元情報を復原する技術を用いることにより、登り窯の3Dモデルを作成することに成功した。フォトグラメトリとも呼ばれるこの技術は、その情報量の多さや導入が比較的容易なことから、新たな考古学調査・研究の手法としても注目されている技術である。

本講座では、登り窯の計測調査の実践とその成果について報告するとともに、文化財の保存と活用に3Dデータがどのように寄与するかを考えていきたい。

(3)第 3390 回「デジタル・ヒューマニティーズとデジタル・アーカイブによる学藝の革新
−そのさらなる可能性を探る−」

日時 ： 2023 年 9 月 30 日(土) 【誤】~~10:00～11:30~~ →【正】15:00～17:30

講師 ： 立命館大学アート・リサーチセンター センター長/文学部 教授 赤間 亮
立命館大学衣笠研究機構 招聘研究教員 高野 明彦
筑波大学 名誉教授 杉本 重雄
ロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS) 人文学部長 Graeme Earl
立命館大学アート・リサーチセンター 副センター長/映像学部 教授 細井 浩一
【司会】立命館大学アート・リサーチセンター リサーチマネージャー Travis Seifman

講師による内容紹介 ：

立命館大学アート・リサーチセンターは、2023 年度に設立 25 周年を迎えます。設立以来、学術都市京都にある立命館大学の芸術・文化研究の拠点として、デジタル技術を活用した新たな研究を目指してきました。このようなデジタル技術を手法とした研究は、デジタル・ヒューマニティーズ(人文学)と呼ばれるようになり、人文学の最も先進的な研究領域となり注目を集めています。そのため、アート・リサーチセンターの役割は、ますます重要度を増してきており、国内のみならず、海外のデジタル・ヒューマニティーズをも牽引する存在になってきています。

また、デジタル・ヒューマニティーズの基盤となるデジタル環境は、デジタル・アーカイブによって構築されています。アート・リサーチセンターは、現在、文部科学省から国際共同利用・共同研究拠点として認定され、「日本文化デジタル・アーカイブ国際拠点」として、海外からも多くの研究プロジェクトを受け入れ、活動を強化しています。

アート・リサーチセンターにおいてこの 25 年間に研究蓄積されてきた日本の伝統文化を中心とするデジタル・アーカイブは、すでにオープン化されている他機関のアーカイブズとも紐付けされつつ、日本文化資源のビックデータの一角を形成しつつあります。さらに、メタバースや生成型 AI の急速な浸透に見られるように、人間がデジタル空間をもう一つの活動領域として本格的に切り開いていく端緒にあたる現在、そのような文化資源のビックデータは、専門的な学術研究用のソースとしてだけではなく、より社会に開かれた活用が求められる人類共通のデジタル資源になっていくと考えられます。

デジタル・アーカイブが切り開いたデジタル・ヒューマニティーズの地平は、パブリック・ヒューマニティーズとも言うべき社会的な革新と拡張を迎えつつあります。今年度、25 周年という一つの区切り際して、デジタル・アーカイブに関わる重要な業績を積み上げられ、アート・リサーチセンターの活動についても様々なアドバイスをいただいてきたゲストをお招きし、センターの到達点と今後の方向性を議論しつつ、さらに国内外の関連機関、研究者との連携を図るため、記念シンポジウムを開催します。

■立命館土曜講座

1946 年から続く、市民向けの無料公開講座。故・末川博名誉総長の「学問や科学は国民大衆の利益や人権を守るためにある。学問を通して人間をつくるのが大学であり、大衆とともに歩く、大衆とともに考える、大衆とともに学ぶことが重要」との思いのもとに、大学の講義を市民に広く開放し、大学と地域社会との結びつきを強めることを目指しています。

＜WEB サイト＞ https://www.ritsumei.ac.jp/doyo/